

教職員の働き方改革に関する活動報告と今後の広がりへの課題

工藤祥子 神奈川過労死を考える家族の会

年々多忙化し、過労死、精神疾患が増加している教師の働き方を改善するべく、昨年度から本年度まで全国過労死を考える家族の会（以下家族の会）及び教職員の働き方改革プロジェクト（以下プロジェクト）の呼びかけ人として、要請行動、講演、意見交換、傍聴、公務災害支援などを行った。

またこれだけ過重長時間労働であり、世論も高まっている中、肝心の教師や保護者からの広がりが感じられず、国の抜本的見直しの見直しに至らない。今後、どのように当事者である教師、保護者を含めた世論に働きかけていけばよいかを考察する。

主な活動

2017年

- 5月より 「教職員の働き方改革プロジェクト」呼びかけ人として教師の働き方改善への署名活動開始
- 6月2日 文科省・厚労省へ署名を届け要請行動
- 7月25日 教職員の働き方改革シンポジウム（プロジェクト）
- 8月29日 「緊急提言」に対する記者会見（家族の会・プロジェクト）
- 9月5日 日教組講演
- 9月22日 馳元文科大臣面談
- 10月2日 家族の会より「緊急提言」に対する要望を文科省初等中等局長に手渡し、記者会見（家族の会）
- 11月8日 地方公務員災害補償基金への要請行動（家族の会）
- 12月4日 下間文科大臣付官房への要請行動（プロジェクト）
- 12月7日 全教本部意見交換（家族の会）

2018年

- 1月 教職員の働き方への署名「50万筆」を超える
 - 1月22日 文科省・厚労省に50万筆の署名を届け記者会見（プロジェクト）
 - 6月1日 教職員働き方改革プロジェクトシンポジウム（プロジェクト）
- 他、富山、岩手、熊本、川崎、北海道、青森、長野、佐賀などで各地主催の教育シンポジウムで講演など（プロジェクト）
- 神奈川、東京、千葉、岩手で過労死等防止啓発シンポジウム登壇、文科省中教審「学校の働き方改革特別部会」の傍聴、他。

☆「教員の時間外勤務に上限規制を設定し、学校の働き方改革を」署名活動について（プロジェクト）の取り組み

- ・2017年5月にSNS「change org」にて電子署名を開始。(記者会見)
- ・翌6月ネット上だけで3000筆、文科省義家元副大臣、厚労省山越労働基準局長に手渡し、要請
- ・7月 SNSだけでは対象が限られるとの声から「紙媒体」での署名開始
紙媒体署名により、全国へと広がりを見せる
- ・2018年1月、紙・電子署名合わせて「50万筆」突破、約5700件のネット上に意見コメントを集約し、1月22日 文科省丹羽副大臣、厚労省山越労働基準局長に手渡し、要請行動

↓

署名が「50万筆」を突破、「change org」のネット署名も歴代最高になったことは世の中の「教職員の働き方」に対する関心の高さ

約5700件のコメントは、保護者、一般、生徒、教職志望者など幅広い
教職員・・・かなり切実な内容が多い、実名で告発のような内容も
保護者・一般・・・「先生の働き方」を変える為に協力したいなど
生徒・・・先生の大変さ、自分たちも部活動がきついとのも
教職志望者・・・目指す自信がない、教職に就きたいがその時は変わって
いて欲しい

↓

7カ月で「50万筆超」は、過労死等防止法制定を求める署名55万筆と同じく大変重い数字

教師だけでなく全国で老若男女職種問わず集まった署名コメントの重さ

☆全国での講演活動での取り組み

- ・テーマの依頼は大体3つ
- 1、「教職員以外の人たちにも教師の仕事を知ってもらいたい」
- 2、「過労死してしまったご遺族の話を通して先生方の労働意識を少しでも変えて頂きたい」
- 3、「教師の働き方」に対するパネルディスカッション（教師、遺族、保護者委員会、一般など）への参加

・テーマに対しての内容、働きかけ

- 1、我が家の事案を基に、長時間過重労働の実態、給特法という教師独自の働き方（高プロの先駆けの様な・・・）、労務管理意識の低下、人員不足、余裕がなく過労死、精神疾患が増加し、児童生徒への対応力低下、教職員内のパワハラが起こる構図、新任教師の問題など。

↓

教師だけの問題ではなく、実はそこに学ぶ子ども達にとって大問題。いじめ、個々に対する指導、授業準備時間のなさ、児童生徒に教師の死んでしまう姿、病気になる姿を見えてはならない事の訴え、保護者、地域の方へ理解と協力をお願い・・・他

- 2、我が家の事案から、主に教師向け、聖職意識による働き過ぎ、部活動の問題、ライフワークバランスについて、色々な問いかけに対して挙手をしてもらうなどの投げかけし参加してもらう

↓

どんなに健康でも、働き過ぎたら過労死に至るという当事者意識を持ってもらう、労基法、労安法など給特法があっても教師にも適用されるべき法律や色々な通知ガイドラインへの理解、教師の聖職意識からの働き過ぎが、逆に国や保護者、地域から期待され仕事を増やしている原因である、結局子ども達の為にならない、公務災害の難しさ・・・他

- 3、パネルディスカッションでの組み合わせ、テーマ毎に違うが、教師の大変さを知り、それをどうみんなで分担するか、教師＝公務員だから給与良いし働くのが当然という偏見をなくす、保護者（PTA）、民間の労働組合などの参加が有難い

・講演の感想など

- 1、給特法についてはほとんどの人が知らず、大変な驚き
給特法と高プロと結び付け、イメージしやすく働き方改善をという声、何故そんなに忙しいのか何か減らせないかの疑問や、我が子への心配
どうしたら先生の業務減のお手伝い出来るのか・・・他
- 2、我が家の事案と自分の働き方が同じである危機感を強く感じた、やはり仕事を減らさなくてはならない、減らしたいけれど出来ないもどかしさ、教師の一部ではなく全体の意識改革が必要・・・他
- 3、それぞれが違う立場であっても、必ず学校、教育に繋がっている（年配の方でもお孫さんなどで）ことから、非常に有意義な意見交換が出来る、特に部活動についての意見交換、給特法への驚き・・・他

☆教職員の働き方改革を実現していくために

給特法がある為、財政に大きな壁、簡単に動かせない、2020年教育指導要領の大改革があるが今の人員では破たんするのでは、ライフワークバランスが取れない働き方、授業準備不足、余裕なく子ども達にきちんと接することが出来ないという、本末転倒な大問題、教師自身からの声が上がらない、声を上げる遺族、被災者の少なさ・・・他課題山積み

ではどうすればよいか・・・

学校に関わる教師、保護者、地域の意識改革と世論への喚起

それぞれの課題

- ・教師・・・やりがい搾取、労務管理意識なし、他
- ・保護者・・・学校に任せ過ぎ、過干渉と無関心、他
- ・地域・・・学校に求める行事、学校外での児童生徒の学校対応について、
地域が学校に出来る事、他

それぞれの意識改革

- ・教師・・・好きな仕事のやり過ぎが実は児童生徒ときちんと向う時間を無

くしてないかの振り返り、自分の家庭は幸せなのか、自分が健康を損ねたら誰にどのような迷惑を掛けるか、どうせ変わらないとあきらめていないかなど

- ・保護者・・・先生方の働き方を知り、もし自分の家族だったらと考える、余裕のない現場に我が子を毎日通わせることについて考える、家庭教育までも学校に任せていないか
- ・地域・・・必要以上に先生の手を借りていないか、地域が協力できることを積極的に提案、シルバー人材活用など

世論への喚起

「教師の働き方」は教師だけ騒いでも変わらず、実は他人ごとではなく
「我が子の問題」「これからの日本を創る子育ての問題」
という意識喚起をして共によくしていこうと共通意識を持つことが大切

義務教育保護者が世論の大半を占めるのに、変えていこうという意識にならない実態・・・他人ごと、「教師」の多忙化が我が子の問題に結びつかない、学校は何でもしてくれて「当然」という常識

↓

保育園、待機児童問題 SNS を皮切りに「日本死んだ」国会での議論まで
保育園は入れないと、自分たちの生活に大きな支障をきたす。
乳幼児の我が子を入れる保育環境に非常に敏感

↓

義務教育の小、中学校は？

必ず入れるから、いれたらお任せ安心・・・保育園の様な議論は出ない
いじめ問題は教師の見落としが子ども達を助けられない事が多い
もっと余裕がないと児童生徒を見られないという教師の切迫感薄い
学力低下、公立学校離れ、格差社会による学力格差、教育機会不均衡

児童生徒の観察、指導、授業準備など本来業務が出来る様に、精神的、肉体的、時間的、人員的余裕を教師、保護者、地域が一緒に実現していく、みんなが WIN WIN の関係構築

「教師の働き方改革」は同時に「子ども達の教育改革」であるという世論喚起が今後必要

世論の高まりがやがて国を動かす。実際各自治体も学校の働き方改革を始めており、文科省でも議論が進んでいる

現在、一部の現職退職教員、教育の各専門家、私達遺族、被災者などが、教育を変える最大で唯一のチャンスかもしれないと、意見を集約して何とか変えようとそれぞれの場所で、それぞれの発信をしている。

毎日の様に教育の問題が報道されるようになり、被災した10年前から考えられない変化。それぞれの立場で、それぞれの発信方法、世論喚起を引き続き粘り強く行っていくことが今後、さらに大切になってくる。

遺族としての発言の大きさも日々感じている。ただ聖職意識や公務災害などのハードルがあり、全国で声を上げられる遺族被災者が大変少ない。